

木材を使って広がる福祉用具の世界

福祉用具から見る、木材用途の新たな可能性

森林総合研究所 木材改質研究領域長 松井宏昭氏に聞く



さまざまな福祉用具があります。杖や歩行器、車椅子、介護用ベッド、補装具と呼ばれる義手や義肢はもちろん、手すりも福祉用具です。それは高齢者から、障害を抱える人、傷病から回復めざしてリハビリテーションに励む人まで、その生活を補う大切な役目を果たしています。

近年は、バリアフリーの施設や、「できるだけ多くの人が利用可能であるようなデザインをめざす」ユニバーサルデザインの考え方が普及してきました。「福祉用具」という言葉が示す意味も、より幅広いものになりつつあります。

福祉用具は、金属や樹脂などさまざまな素材で製品化されています。木質材料もその一つです。では、福祉用具に求められる木質材料の良さや、必要とされる性能は何か。それを探る研究があります。(独)森林総合研究所の木材改質研究領域長の松井宏昭先生にお話を伺いました。

「福祉用具」とは？

福祉用具産業の転機

前から福祉機器とか、介助具、介護具などいろいろな呼ばれ方をしてきましたが、法律上の定義

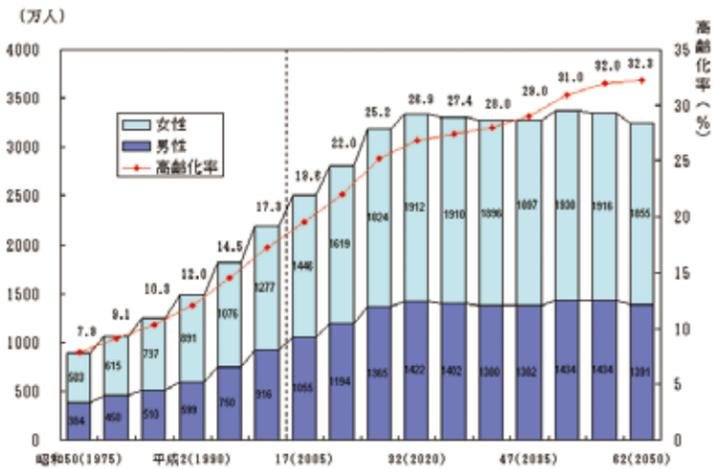
は23・3%となりました。(図-2)

2050年に高齢化率は32・3%に達し、国民の3人に1人が65歳以上の高齢者となる社会が来ると推定されています。また、障害者手帳を持っている人は人口の約5%と発表されています。障害の定義が異なる欧米ではそのカテゴリーはもっと広く、例えば内臓疾患でも治療の見込みの立たない人、出産前のお母さん、言葉の通じないヒスパニック系の人なども障害者にカウントされています。

このように生活に支援を要する人、これに当事者の家族を加えると、国民の過半数以上の人が、高齢や障害と向き合う日々をおくっていることとなります。二人に一人は何らかの福祉用具の対象者であり、残る他の人は子供を除いて介護する立場にありますから、ほとんど皆が関わってくる世

二人に一人が高齢や障害と向き合う時代

図-2 日本における高齢化率の推移

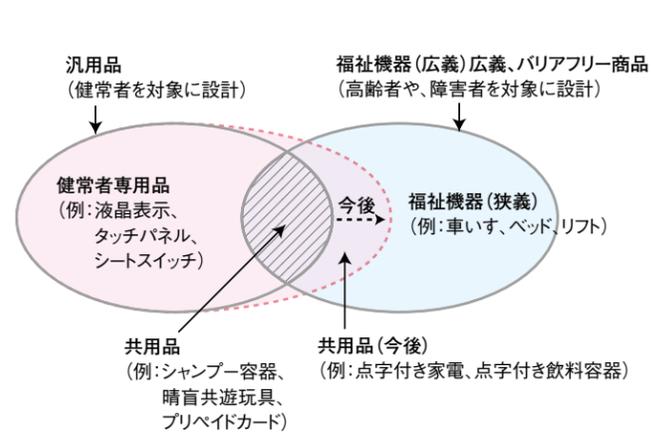


資料出所：1995年までは総務省「国勢調査」、2000年は総務省「人口推計月報」、2005年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」(平成9年1月推計)による各年10月1日現在の推計人口(中位推計)

図-3 高齢化に係る身体的機能の低下

年をとると
 ■色彩感覚が変化したり、
 ■暗いところではものがよく見えなくなったり、
 ■歩く歩幅が狭く爪先が上がりにくかったり、
 ■骨がもろくなって転倒するとすぐに骨折したり、
 ■また生理面では排泄の回数が多くなったり、
 と病気以外にも身体機能の低下が著しく、日常生活を送る上で様々な支障が生ずる。
 さらに、身体機能の低下は回復することなく、個人差が大きいことも高齢者の典型的な特徴である。

図-1 福祉機器、バリアフリー商品、共用品の関係



があります。「福祉用具の研究開発及び普及の促進に関する法律」(平成5年制定)で「心身の機能が低下し日常生活を営むのに支障のある老人または心身障害者の日常生活上の便宜を図るための用具及びこれらの者の機能訓練のための用具並びに補装具」と規定されています。実際にはもっと広義に解釈して高齢者や障害を抱える人やその家族が日常生活を快適に暮らすための用具、と理解していい。そう考えると、バリアフリーの施設も、ユニバーサルデザインに属するものもその範囲に入り、福祉用具のカテゴリーは広くなります。使い勝手のいい、工夫された用具と言いつてもいいかもしれません。(図-1)

福祉用具の開発は、国の福祉行政の転換にもなって大きく変わったといえます。最大の転機は2000年(平成12年)4月にスタートした介護保険制度です。続いて、2003年には障害者に対する支援費制度(後に障害者自立支援法に移行)

界です。高齢化が急速に進んでいること、障害者の社会

参加のニーズの高まってきたこと、こうした問題への社会的な認識が広がりをみせていることなどが背景となって、福祉サービスは拡大しつつあります。一人当たりの福祉用具の消費量や支出額も増えていくことが予想されます。福祉用具の市場は、高齢者や障害者など対象とする人によってニーズが様々で、これからは、福祉用具ごとに需給構造が急速に変化していくものと考えられます。(図-3)

福祉用具産業の市場は1兆1184億円(2009年)にまで拡大しています。

「木の文化」のコンセプトを福祉用具に活かす

福祉用具は人が使う道具です。使う人にも介助する人にも、なごみや豊かさという要素は製品開発にあたって欠かせません。福祉用具の材料として、金属やプラスチックなどではなく木材を使い、というニーズが、この市場の家具・建物(736億円)、移動機器(9530億円)等の領域で高まっています。対象者の生活を補う用具となれば、直接手で触れることとなります。機械的物性を求められながらも、知らず知らずのうちに木製が使われています。好例が手すりです。公共施設の手すりは別として、家庭ではほとんど木製の手すりが使われています。人の心になごみを与える木材の特性を生かした木材の新たな利用展開として、高齢者や障害者が家族と一緒に過ごす住・生活空間や、そこで使われている全ての用具・機器に、もっと木材を使用することを提案していくことが大切になってきています。

家具や建物、什器、玩具、履物など、わが国ではもっぱら木材が使われ、利便性だけでなく芸術的文化的要素も併せて「木の文化」として語られ

自閉症者のバリアフリーを考えるー木製パーテーションの活用

図-7 パーテーションの活用例

自閉症の人が、混乱なく見通しをもって就労でき、生活や活動することを目的とする
→自閉症等の人のバリアフリー

★視覚的な優位性を生かしつつ
 ★不快な環境を遮蔽する
 ★パニック等を鎮める
 (カームダウンエリア)

パーテーション

- ・部屋
- ・間仕切り
- ・衝立



①② 使う人が自分で出して、片付ける

③ 1面タイプを150センチの高さにして使っている。120センチでも高さは充分との評価



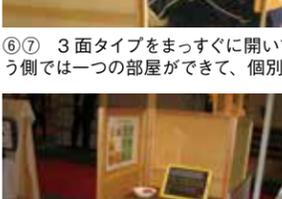
④⑤ 3面タイプを「コの字」型に折りたたんで使用



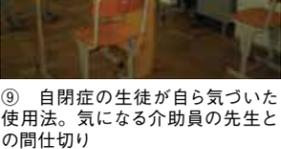
⑥⑦ 3面タイプをまっすぐに開いて使用。その向こうとこちら側。向こう側では一つの部屋ができて、個別指導に使う



⑧ 3面タイプで机を囲んで使う



⑨ 自閉症の生徒が自ら気づいた使用法。気になる介助員の先生との間仕切り



基本的な考え方

簡単に取りはずしができ、移動可能なパーテーションを使用

■ワークスペース

1. 壁向きに作業できるスペースを作る（前方がすでにパーテーションとなっている）。卓上パーテーション
2. パニック対応や特に配慮が必要な人のため、1箇所程度、電話ボックスタイプのパーテーションの配置ができる場所を整備。高さは1800mm。

■休憩スペース

食事の場所とは区別して、本当にくつろげる場所を用意。狭くてもよい。ソファとかマット。簡易パーテーションも用意し、必要に応じて個別の空間を創出。

■事務スペース

職員室タイプの机の配置だけでなく、壁向きの配置も検討。卓上及びパーテーションの配置で、空間の間仕切りを創出。

次は、自閉症の人を対象としたバリアフリー環境を考えてみましょう。

自閉症などのコミュニケーション障害のある人も、学校を卒業すると地域の会社に就労したり、知的障害者施設や地域作業所で働くことになりま。自閉症者の中には仕事で自立できなかつたり、職場で不適切な行動をとったりする人もいます。これまでその原因は「問題行動」と言われ、自閉症者自身に向けられていました。しかし、その職場環境を見直すことで、多くの問題が解決することもわかってきました。誰でも騒々しい人混みのなかで集中して仕事をするのは難しいことです。

そこで考えられるのが、パーテーション（間仕切り）の活用です。パーテーションをつけるなどの工夫をすると、本人の混乱は小さく、仕事に集中しやすくなります。職場だけでなく自閉症児の教室でも有効です。

オフィス機器として市販されている金属製のパーテーションは重く、移動が簡単ではありません

木製のパーテーションを開発しました。（図-7）木製は軽く、取り外しや移動が簡単であるという利点があります。高さは最大180cm、高さ調節を可能にし、1面タイプと3面タイプの2種類を作りました。3面タイプはコの字型に観音開きにしたり、まっすぐに開いたりして使うことができます。これを中学校の特別支援教育の教室に

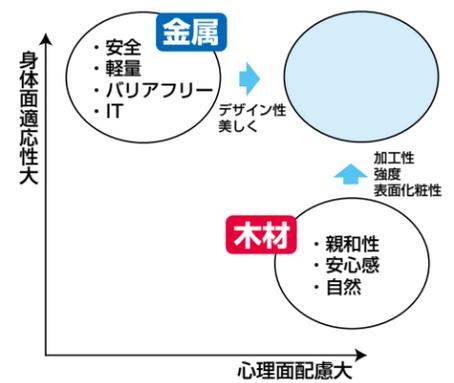


たかが手すり、されど手すり

福祉用具は対象者によってニーズは様々です。したがって、開発にあたってはターゲットを絞ることが肝心です。つまり、①対象者は誰か？ ②利用者のニーズは？ ③どのような用具か？ ④開発のポイントは何？ といった要素です。高齢者のニーズを例にみてみましょう。（前頁 図-3）

これらのニーズを考慮して、具体的な対応例を絵にしてみましたイメージが図-5です。どのイメージでも「手すり」が大きな役割を担っています。400億円といわれる手すり市場は、素材別では木製が38%、樹脂製が49%（このうち合成木材は約5割）、金属製が13%となっています。（図-6）これまで手すりの使用は主として公共施設やビルディングなどが大方を占めてきました。今後、

図-4 木製福祉用具開発の進め方



てきた伝統があります。木のぬくもり、年輪や木目の美しさ、色や香りなど、直接人間が触れて使う福祉用具だからこそ、木の良さを活かし、木の文化とコンセプトの共通するところで木材使用の可能性を探っていくべきです。（図-4）

図-5 高齢者のニーズの対応例のイメージ

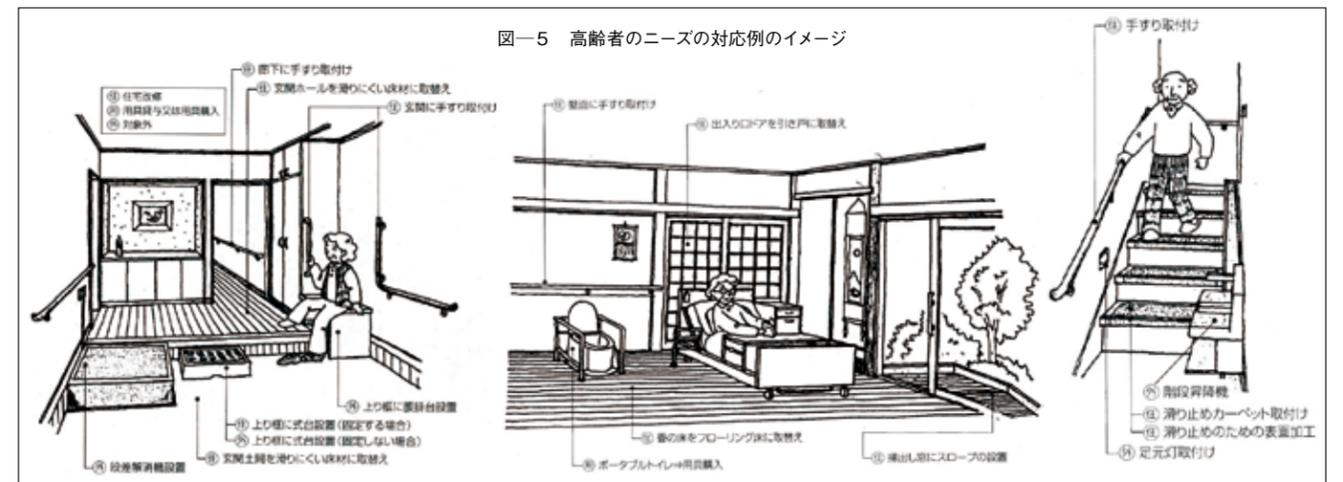
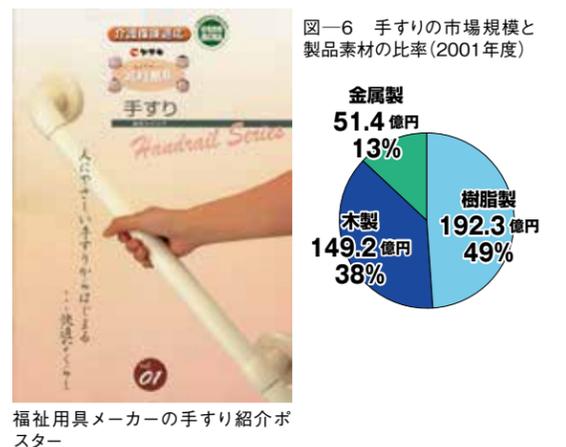


図-6 手すりの市場規模と製品素材の比率(2001年度)



高齢化が進み、高齢者のいる家庭の生活の安全・快適化が推進されていく中で、家庭内での高齢者の移動機能を補う手すりの設置は不可欠とされていますが、既設の住宅に後付けする手すりの開発はほとんど進んでいません。手すりは、木材が素材としてなじみやすい福祉用具であり、真に安全で信頼性が高く高齢者にやさしい木質の手すりや、その接合方法の開発が望まれています。しかし現状では、市販されている手すりや、新たに開発するときの問題となるのは、性能・規格面のJISが未整備のため、各社独自の社内基準やBL (Better Living 優良住宅部品認定制度) による部分が多いのが現状です。木製の丸棒手すりでは、とりわけ横手すりのブラケットの位置合わせが難しかったり、住宅内の石膏ボードの壁、土壁、ふすま、障子などそれぞれの基本モジュールが異なるため、補強板をつけないと手すりを施工できないのが実態です。このため、施工現場や利用者からは、①どんな壁にも、②簡単に、③安全に施工可能で、かつ④性能面で高齢者等に配慮した手すりが欲しいという要望が多く出ています。

「木の良さ」を活かした福祉用具への期待と可能性



高さ調節のついたパーテーション
(森林総合研究所 松井先生の部屋で)



松井宏昭氏のプロフィール

独立行政法人森林総合研究所木材改質研究領域長
京都大学博士（農学）

■略歴

昭和56年3月 京都大学農学部林産工学科卒業
昭和56年4月 農林水産省入省
平成2年8月 森林総合研究所入所。化学加工研究室長、表面改質チーム長、機能化研究室長を経て、平成19年4月より現職。

■受賞

ボランティア・ハートフル賞
日本土壌肥科学雑誌論文賞

■現在の諸活動

日本福祉工学会評議員、日本木材学会評議員、生活環境支援研究会代表、ウッド・アクセシブル・デザイン研究会代表、東京福祉大学非常勤講師、NPO法人自閉症サポートセンター理事長、千葉県、柏市等の福祉（健康）関係の各種委員会の委員など

2012年版の福祉機器ガイドブック。個々の需要に応じた福祉機器の多様な世界が伺える



表-1 木製が期待できる福祉用具（2001市場実績から試算）

製品	2001実績	木製(期待)率	期待額
家庭用治療器	1,062		
義肢・装具	2,334		
義肢・装具	352	0.5	176
かつら	1,110		
義歯	872		
パーソナルケア関連	2,427		
おむつ	801		
入浴関連	208	0.1	21
排泄関連(ポータブルトイレ等)	1,293	0.5	647
その他	125		
移動機器等	1,104		
杖・歩行器	56	0.5	28
車椅子	337	0.1	34
福祉車両	684		
その他(リフト)	27	0.1	3
家具・建物等	864		
ベッド	492	0.5	246
ホームエレベーター	124	0.1	12
椅子	26	0.5	13
階段昇降機	52	0.1	5
段差解消機	11	0.1	1
手すり	93	0.5	47
その他	66	0.1	7
コミュニケーション機器	3,135		
眼鏡	2,774		
補聴器	252		
その他	109		
在宅介護関連分野	482	0.3	145
福祉施設用機器システム	63		
社会参加支援機器	427		
福祉用具(狭義)計	11,927		1,383

注1：市場実績は狭義の福祉用具に限定し、共用品を除いた（経済産業省調べ）
注2：黄色で表示した福祉用具は、すでに木製品の使用が一般的にみられるもの。木製率は50%とした。
注3：その他に今後、木製品の利用を期待したい用具は、試算の対象とした。木製率は期待値。

た。JISの「規格作成配慮指針」の制定によって木材が福祉用具の材料として今以上に使われる可能性があることもわかってきました。

日本福祉用具・生活支援用具協会（JASPA）が推計した2009年度福祉用具産業の市場動向調査結果をもとに、これまでヒヤリングして得られた木材使用率を木質製品（期待）率として算出した額を、木製福祉用具の市場規模（推計）として表-1に示しました。木製福祉用具または一部に木材が使用されている福祉用具と見込めるものとして、杖、ベッド、椅子、手すり等について木質製品期待額を試算してみた結果、1423億円が木製福祉用具の潜在的な市場規模であると言えるようです。

福祉用具の部材として木材に求められる性能基準は、強度などの性能とは別に、なごみや豊かさを表現する木質感や美観性が重要な要素になると考えられます。これからは、こうした要素を重視した高齢者や障害者などの住・生活空間や、そこで使われる全ての用具・機器を対象に木材の良さを活かした材料や部材の開発が期待されています。

貸与して、活用状況を見てみました。写真は平成19年2月にこの教室を訪れたときにいただいたスナップです。（図7・写真①～⑧）

写真⑨は、生徒が自発的に自分の机と介助員の先生との間に1面タイプのパーテーションを設置した事例です。教室にパーテーションを貸与してまもなくのことで、生徒はお節介な介助員の先生の視線を遮る（笑）、この妙案に自らがついたようです。



卓上タイプのパーテーションの使用イメージ



卓上タイプで3面鏡タイプの「どこでもパーテーション」。T君のお母さんは、いつもは食事中の様子を見るとつい口が出てしまいトラブルの原因となっていた。しかし、どこでもパーテーションのおかげで母さんもT君が見えにくいので、T君もお母さんも安心して食事が出来るようになった。好物のチャーハンを嫌いな紅シヨウガを残してきれいに平らげた

木製福祉用具開発の課題

木製福祉用具を扱っている代表的な事業者を対象に、木材使用についてのアンケート調査を行いました。主要なメーカー宛てに、記述回答方式のアンケートシートを郵送し、5社から回答を得ました。質問項目は、木製福祉用具の取扱量、使用されている樹種、主な木質材料の種類、国産材を使用するための課題などです。

福祉用具の主な品目である義肢・装具、入浴関連、ポータブルトイレ、杖、車椅子、福祉車両、ベッド、ホームエレベーター、椅子（座面高等に配慮のあるもの）、階段昇降機、段差解消機、手すり、コミュニケーション機器のいずれにおいても、木製の福祉用具を取り扱っているという回答でした。このうち、ベッドと手すりは木材の使用率が高いことが分かりました。使われている樹種は多様ですが、一部ビノキの使用報告もありましたが、ほとんどがブナ、カシ、アッシュ、などの広葉樹です。

国産材を使用するために共通した課題は「価格が高いこと」、「色のばらつき、色あわせが難しいこと」、「表面処理、塗装にコストがかかること」、「寸法変化が大きいこと」などがあげられています。

アンケート調査に加えて、開発メーカー、販売会社への聞き取り調査を行いました。ここからも木製福祉用具開発の課題がみえてきます。

- ・木製製品は、洗浄や消毒時の変色、製品使用時にできる表面の傷つきが問題とされ、レンタル品としては敬遠されている。
- ・福祉用具部材として最もよく用いられている木材は、海外から安定量が確保しやすいラバーウッドやタモの集成材に頼らざるを得ない実情がある。これは国産材の安定供給によって対応は可能である。

福祉用具の品質確保、評価の基盤整備を図るためには福祉用具に関するJISの体系的な整備が必要だが、福祉用具は種類が多く、利用者の身体的特徴に応じた注文生産品も多く、要介護高齢者や障害者の身体状況も様々なので、標準化のための高齢者や障害者の心身機能のデータ取得に、多くの時間と労力が必要で、規格化や標準化の作業が進んでいない。

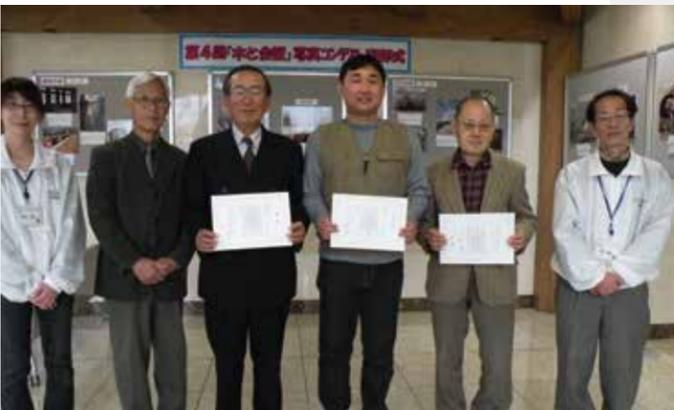
過去の木製福祉用具に関するクレーム対応の経験などから、メーカーやレンタル業者が木材の強度や変色に対して過度の不安を持っている。これらの問題の中には、木材に関する正しい知識や加工技術、さらには木材の安定供給があれば回避できるものも多く、将来的に木製福祉用具の信頼性向上は可能であると考えられます。

一方で、福祉用具に木材を使用する事例は増えてきています。また、強度や加工性が優れているから木材を使用するといったことより、消費者ニーズに応えるために木質感を武器として心理面に訴えた商品を開発するメーカーも増えてきました。



第4回 「木と合板」写真コンテスト

入賞作品のご紹介



今回は応募者が広域に及んだことから、式に参加できた方は前回よりも少なくなりました。



表彰式を終えて。話題は受賞の感想から、撮影時の苦心までいろいろ。

5・7・5の部



●優秀賞
「木の型が 和菓子の歴史 物語る」
「老舗の店先」 太田誠一(新潟県)

講評/和菓子にもいろいろな種類があり時代によって文字や形が変化してゆくのかなと感じられます。老舗の和菓子を一度食べてみたいものです。



●最優秀賞
「間伐で 切られた木は 杭で立つ」
「間伐材」 古口公司(東京都)

講評/樹木のときはたくさんの枝葉をつけていましたが、これからは木杭としてひたすら支えに徹します。それにしても鋭利な切断面の筋はどんな刃物によったものか興味津津です。



●理事長特別賞 ※フォト5・7・5の部応募作品
「癒し系 パンダも木には 癒される」
「癒し系」 小林功(千葉県)

講評/癒し系の大名称である「パンダ」。毎日たくさんの人達に見られて疲れているのかな。人も木に癒されるように、パンダも木に癒されるのでしょうね。後ろ姿がまた印象的です。



●館長特別賞 ※一般の部応募作品
「皆で冒険」 永木宏(埼玉県)

講評/空師はロープだけで木に登り、樹形や樹勢を整えとか。そんな空師の卵を思わせる子供達、それを見守る大人、ケヤキ、抜群です。



●特別審査員賞 ※一般の部応募作品
「あ〜いい湯(木) だ〜な〜」
椿原元(兵庫県)

講評/写真を手にとったとき、思わず引き込まれてしまうだけの強さを、子供の表情は持っていると思います。きっと、作者も同じような気持ちだったと思うのですが、あえて日丸 構図にせず、子どもの顔を左側にずらすことで、画面に流れを作っているところはとても好印象だと思います。

建材の部



●最優秀賞
「かくれんぼ」 多和裕二(東京都)

講評/少し高めの位置から様子をうかがう兄、低い位置で周りを見渡す弟、それを反対方向から見守る父の関係性が大きな木の遊具を挟んでよく表現されています。



●優秀賞
「霧中作業」 大西宏徳(愛知県)

講評/ライチョウの住む湿地を護るためにプロの作業員が木道を敷設している図ですが、バランスのとれた構図に遠方のガスが奥行きを生み出していて、引き込まれます。

「第4回 木と合板 写真コンテスト」選考結果

一般の部	タイトル	氏名(敬称略)
最優秀賞	なかよし	宮沢千春
優秀賞	いつもの散歩道	平田晃一
佳作	古式ゆかしく	平野昌子
佳作	スタンドバイミー	鈴木雄一朗
佳作	楽しい遊具	能登正俊
佳作	小さな「かくれんぼ」	橋本春雄
佳作	僕の大好きな緑圃④	本屋敷恵美子

建材の部	タイトル	氏名(敬称略)
最優秀賞	かくれんぼ	多和裕二
優秀賞	霧中作業	大西宏徳
佳作	暖かな光	入江和
佳作	楽しい渡り初め	伊藤良一
佳作	冬の影	松山進
佳作	母校	加藤謙一
佳作	モニュメントとスカイツリー	武藤敏美

5・7・5の部	タイトル	氏名(敬称略)
最優秀賞	間伐材	古口公司
優秀賞	老舗の店先	太田誠二
佳作	新一年生を待つ	河内聡
佳作	22歳の春	藤森保男
佳作	日影のアート	高橋一吉
佳作	虫の芸術	野村昌弘
佳作	盲導犬の見る夢	小田中華一

特別賞	タイトル	氏名(敬称略)
理事長特別賞	癒し系	小林功
館長特別賞	皆で冒険	永木宏
特別審査員賞	ああ〜いい湯(木)だ〜な〜	椿原元

*理事長特別賞板賞につきましては、選考により理事長特別賞となりました。



【フォト5・7・5】最優秀賞の古口公司さん。昨年は【一般の部】佳作入賞



【一般の部】最優秀賞の多和裕二さん



休日は撮影スポットを求めて散歩するのが趣味という。【一般の部】佳作入賞の鈴木雄一郎さん

一般の部



●優秀賞
「いつもの散歩道」 平田晃一(岡山県)

講評/写真の中で「橋の位置」が大変すばらしく橋から水面と影のバランスも良く表われています。犬は少し不安げに渡っているのかな？



●最優秀賞
「なかよし」 宮沢千春(長野県)

講評/狭い垣根から女の子と一緒にわんちゃんが顔を覗かせようとびったりくっついている姿に仲良しさが伝わってきます。また、女の子とわんちゃんがセンターから外れることによって垣根が強調され、木特有の親しみやすさを感じられる写真です。

平成24年11月20日、開館5周年記念式典を行いました 賛助会員など約250名余が列席するなか、「合板の日」制定を発表 5周年を期に、博物館活動のさらなる発展へ



本誌前号の速報でもお伝えしましたが、木材・合板博物館は平成19年10月の開館オープンから5年目を迎え、特定非営利活動法人の当博物館の活動を支えて下さった方々への感謝を込め、賛助会員及び関係者の皆様、当博物館をご利用いただいた方々を新木場タワー大ホールにお招きし、開館5周年記念式典を挙行政致しました。

式典は、沼田正俊林野庁長官、津国保夫東京都農林水産部長、吉条良明全国木材組合連合会会長はじめ、「日本の合板誕生の父」故浅野吉次郎氏の子孫にあたる方々にもご列席いただき、250名余の関係者が一堂に介する盛会となりました。

またこの日、木材・合板博物館（吉田繁理事長）と日本合板工業組合連合会（井上篤博会長）は共に、11月3日を「合板の日」と制定することを発表し、式典でそのお披露目を行いました。



沼田林野庁長官ら来賓はじめ、故浅野吉次郎氏のご親族も加わり、クス玉を割って5周年を祝しました



主催者挨拶を行う吉田繁理事長

5周年を、木と合板をさらにPRしていく礎に

特定非営利活動法人木材合板博物館理事長 吉田 繁

本日は忙しいなか、たくさんの方々にご列席を賜り、誠にありがとうございます。今から7年前、この新木場タワービル竣工を期に、ここに「合板」の博物館をつくらせてみたらと考えたのが、木材・合板博物館

の始りでした。しかし、そのような博物館をつくっても本当にたくさんの方々に来ていただけるものかどうか、誠に不安でした。いざ開館してみますと、毎年約1万人の方にお見えいただき、5年目の現在、すでに5万人近い方に来館していただきました。こうした成果が得られましたのも、一重に皆様のご支援が功を奏したものと、日頃のご尽力に感謝申し上げます。開館当初、学校関係者の皆さんに課外授業にお使いいただけませんかとお願ひしましたところ、たくさんのお子さんに来館していただくことになりました。次代を担う子供たちに、合板の良さ、木材の大切さを学んでいただきたいと思ひます。また、世界で唯一の博物館として、海外からも多くのお客様にご来館をいただいておりますことは、設立を担った一人として誠に嬉しい限りです。名古屋の中日本合板工業組合さんに、日本合板誕生の父、浅野吉次郎氏の貴重な資料があるとお聞きし、5周年を期に当博物館にお預かりできないかとお願ひ致しましたところ、ご快諾をいただき、当博物館に新たに浅野吉次郎氏の特設展示コーナーを開設できました。あらためて御礼申し上げます。また今年10月木材業界の新人を対象に木材知識の普及をめざし「ウッドマスター（基礎）講習会」を開講し、ご好評をいただきました。業界の裾野を広め、これからも合板の良さを伝え業界活性化にお役に立てたと念じております。この事業はまだまだこれからが正念場でございます。皆様のかからぬご支援をお願ひし、御礼の言葉とさせていただきます。ありがとうございます。



挨拶する岡野健館長

「木を使おう」―地球の未来に向けたメッセージを担う博物館に

木材・合板博物館館長・東京大学名誉教授 岡野 健

館長の岡野でございます。5周年を迎え、賛助会員の皆様、また、これまで博物館をご利用いただいた皆様には心からの感謝と御礼を申し上げます。

当博物館が皆さんに広く何をメッセージするのか。それは、これまでも、またこれからも「木を使おう」という一語に尽きるかと思ひます。私たちが日々肌で感じる地球の気候変動、危機に脅かされる地球環境の問題を解決し、少しでも明るい未来を次世代に引き継いでいくことは私たちがすべてに課せられた使命です。それが出来るのは樹木の活用にはありません。その樹木を植えるスペースは、現在のスキの人工林を活用し、その跡地に植えていくしかありません。数年前からスキ科という学術名称はなくなりヒノキ科となりました。ヒノキ科の木を使うことで気候変動に歯止めをかける大切さを、博物館は訴えてきました。これからも訴えていきます。

江東区には44の小学校があり、これまで32

校の小学生が社会科見学の授業に博物館を訪れてくれました。子供たちは間伐や人工林の話を目を輝かせながら聞いてくれます。

来館者は子供たちだけでなく、木材に関連する仕事に携わる方々が川上は森林組合の方から川下に至る幅広い方々が来館して下さっています。木材業に関わる新人社員の方に「あなたのバックグラウンドは？」と尋ねて、「木材」と答える方は数えるほどしかいません。木材についての基礎的なバックグラウンドを持つことなしに、誇りを持って木材産業に従事することはできません。この10月、社会人研修事業として、「ウッドマスター（基礎）講習会」を全5日間の日程で開催しました。今年は75人の研修生の方がウッドマスター（基礎）の受講証を手に入れました。この事業は当博物館の基本事業として続けていきたいと考えております。また、「日本の合板誕生の父」浅野吉次郎氏に関わる資料をご提供いただき、展示コーナーを開設することにご快諾をいただきました。中日本合板工業組合、またご家族の方々に深く謝して御礼を申し上げます。

—この5年間を通じて、木材・合板博物館をともに支えて下さった賛助会員の皆様への感謝を込め、賛助会員の代表としてアプライ株式会社 越後谷博代表取締役にご挨拶をいたしました。

また、博物館をご利用いただいた教育機関で学校法人小山市立園の白井雅哲 専門学校テクニカルカレッジ・インテリア科長、江東区立東雲小学校の小池洋校長、同じく江東区立立川南小学校の實川貴久校長の三方に感謝状をお贈りし、實川校長にお話をいただきました。



實川貴久校長にご挨拶をいただきました

次代を担う子供たちの学習の場に

江東区立立川南小学校校長 實川 貴久 様

木材・合板博物館が開館した5年前、私どもの校長会に説明にお見えいただきました。それ以来のお付き合いになります。私がこの博物館を気に入っておりますのは、この一帯はともいえない木の香りがすること、博物館の係りの方の説明がとても上手なこと、そして子供たち一人ひとりにお土産をつくこと（笑）です。子供たちはこれをもとても楽しみにしております。

地球温暖化や二酸化炭素の話や、森林をどうするか、というテーマは小学3年生にはちょっと難しいかとも思いますが、説明がとてもいいせいで、「先生、二酸化炭素が増えちゃいけないんだよね」とか「森林があることは役に立つんだよね」などと言いながら、子供たちは喜んで帰ってきます。引率する先生も同じ気持ちで他の区の先生達にここを紹介したりもしています。昨年度はアカエゾマツのクリスマスツリーを、みんなが幸せになれるようにという思いを込めて、楽しみながら育てさせてもらいました。素晴らしいと感謝しています。これ



これまで当博物館を利用いただいた教育関係者として、(写真右から) 實川貴久校長、江東区立立川南小学校校長、小池洋園専門学校テクニカルカレッジ・インテリア科長の三氏に感謝状をお贈りしました

からも次代を担う子供たちに学習の場を続けていただけたらと思います。ありがとございます。これからもよろしくお願ひします。



挨拶される井上篤博会長

11月3日を「合板の日」に

井上篤博
日本合板工業組合連合会会長

会長に11月3日こそが「合板の日」にふさわしいのではないかとご相談したところ、「それでいい」というご返事をいただきました。くしくも10月8日は木材業界が定めた「木の日」となっております。木を植えて育て、これを合板に誕生させた日が約1ヵ月後の11月3日「合板の日」ということで、この期間を木材合板業界があげて、木材と合板をPRし盛り上げていく機会にしていきたいと思ひます。

2007年、日本合板工業組合連合会が合板誕生100周年を祝し、その年に木材合板博物館が誕生しました。その5周年にあたる今日、「11月3日 合板の日」制定を高らかに宣言します。ここに皆様へ制定の意義と由来をご報告し、今後の篤いご支援をお願いするご挨拶とさせていただきます。

木材・合板博物館は、ここにおられる吉田繁会長、そして私の父である井上博、つまり合板業界の製造と流通に深く関わるこの二人が、合板の博物館をつくろうと意気投合したことから始まりました。2年ほど前、吉田会長から「日本に「合板の日」があってもいい、合板をPRする日を制定して木材合板業界を盛り立てていこうではないか」というお話をいただきました。私は合板製造業の全国団体の会長を拜命しております関係で、何とかお力になれないものかと、合板製造に関わる古い文献を紐解きました。

故浅野吉次郎氏が名古屋の地にあってわが国独自でベニヤレースを開発し、これを貼り合せ合板製造に初めて成功したのが1907年のことです。そしてまさにその日は11月3日であると、「合板50年史」「合板75年史」の記述に見ることから、吉田



浅野吉次郎氏の銅像の前で。左から、井上篤博日合連会長、浅野吉次郎氏のご親族の小谷利子様、小林恒夫様、高田薫様
中日本合板工業組合から寄贈され、新木場タワー敷地内南側に設置された浅野吉次郎氏銅像



中日本合板工業組合、故浅野吉次郎氏のご親族のご好意で実現した博物館3階の浅野吉次郎氏の特設展示コーナーの数々の遺品や資料



アイプライ株式会社代表取締役社長 越後谷博氏に賛助会員を代表していただき、感謝状を贈呈しました



写真左から、沼田正俊 林野庁長官、津国保夫 東京都農林水産部長、吉条良明 全国木材協同組合連合会会長より祝辞をいただきました



博物館の運営スタッフ紹介



壇上に立つ、特定非営利活動法人木材・合板博物館の理事他の方々



博物館の運営スタッフ紹介



壇上に立つ、特定非営利活動法人木材・合板博物館の理事他の方々

新木場 漫歩



東京銘木協同組合
東京銘木市場

「木のまち 新木場」とその周辺エリアで気になる会社、企業、人物、スポットを紹介する新木場漫歩のコーナー。今回ご紹介するのは東京銘木協同組合が運営する東京銘木市場です。東京銘木市場は、新木場駅を降りて右正面に見える千石橋を渡って右側にあります。

東京銘木市場では毎月1度2日間、銘木の競り市が行われています。年が明けた1月23日、24日は新春特別市の日、今年の初競りです。「餅つき大会もやってます、ぜひおいで下さい」とは協同組合専務理事の酒井彰さんのお話。お餅も食べられると聞いて出かけました。

迎えて下さったのは、東京銘木協同組合の瀧井洋一理事長、細川耕作副理事長のお二人です。

木の美と共に生きる文化—銘木市場をめぐるまき歩

新旧の木の文化が交差する世界

和やかな競りの風景

会場に着くと、もう競りが始まっている。銘木の世界では、床柱や天井板などに加工される前の板や製材品は半製品と呼ばれます。半製品の競りは屋外に、製品となった銘木は屋内に種類に応じてコーナーがあり、その場で競りが行われます。赤い法被に緑の帽子を被ったセリ子さんの掛け声に、番号札の付いた白い帽子の買い手が応じて値が決まり、銘木が買い落とされていきます。買い手には女性の方もいます。

屋内外を見通せる入り口に、白が置かれ餅つきが行われていました。今ついたばかりのお餅がテーブルに並んでいきます。組合の方が「たくさん食べてね。あんこ、きな粉に、納豆もあるし、野沢菜もおいしいよ」。外から吹き込む冬の寒

気も、湯気の上がる蒸籠釜の周りでは和らいで、みんな思い思いの味付けでお餅をほおばり、何だかとてもアットホームな雰囲気です。事務所2階の大広間の昼食会場では、山菜蕎麦をいただきました。理事長室で瀧井理事長、細川副理事長のお二人にお話を伺いました。

—銘木と云えば、高価で贅沢な材という印象があります。

材料を活かすコーディネート

銘木についての観点が、昔と今では違うという気がします。日本は豊かな木材に恵まれていたおかげで、木材の美しさを活かす建築様式が受け継がれてきました。昔は、ちよつとしたところにちよつた、いい材を使って、その妙を楽しむというのが銘木のあり方だったと思ひます。

部屋の内装に目に見える形で木を使い、それが天然の美しさをもったものであれば銘木と言えるので、値の高低の問題ではないと思ひます。

住宅材に使われるスギでも大分の日田スギや霧島スギとか、ヒノキなら尾州産というように各地にいい木材はあります。それをあちこちにべたべた沢山使って、それがいいデザイン、いい意匠かといえは、そういうものではない。この理事長室は張り板ですがスギの中目、上の大広間は天然カラマツの全面取りの合板、事務所にはケヤキを使っています。これを無垢材にしたとすれば、どんな加工を施しても、今の強い冷暖房環境の中では全部割れてしまします。現在の住宅は高気密高断熱がスタンダードとなり、空調で中と外の空気を遮断してしまします。ここに無垢の木材を使うときまっています。



事務所2階大広間に掲げられた歴代理事長の肖像



右から瀧井洋一理事長、細川耕作副理事長のお二人

第13回 全国中学生創造ものづくり教育フェア 開催



【木工チャレンジコンテスト】【「豊かな生活を創るアイデアバッグ」コンクール】の2部門が新木場タワーを会場に行われる!!全国から集まった中学生が「ものづくり」を競い合う2日間!

1月26日、27日の両日、第13回全国中学生ものづくり教育フェアが東京で開催されました。この教育フェアでは、中学校技術・家庭科を軸とした「ものづくり学習」の成果を、木工チャレンジコンテスト、「豊かな生活を創るアイデアバッグ」コンクール、「あなたのためのおべんとう」コンクール、創造アイデアロボットコンテスト、パソコン入力コンクールの6部門で、全国から集まった中学生たちが競い合います。会場は新木場タワー、中央区立佃中学校、女子栄養大学の3箇所。このうち木工、アイデアバッグの2部門が、新木場タワービルを会場にして行われました。木工チャレンジコンテストでは、全国の各県各地区ブロックを勝ち抜いてきた16人の中学生たちが、4時間に及ぶ熱い競技をぶつけ合いました。



競技を終えて全員で記念写真



18階展望ホールで行われた「豊かな生活を創るアイデアバッグ」コンクール



1階大ホールで行われた木工チャレンジコンテスト。16人の中学生が4時間の時間制限の中で自分で設計した木工作品を完成させる



第2回 ウッドマスター 講習会を開催します!!

第2回 ウッドマスター(基礎)講習会 受講生募集中

- 主催：特定非営利活動法人 木材合板博物館
- URL：<http://www.woodmuseum.jp/>
- TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602
- E-mail：info@woodmuseum.jp
- 日時：平成25年4月16日(火)～20日(土) 9:00～17:00
- 参加費：1名あたり 一般/100,000円 賛助会員/90,000円



木材業界に羽ばたく新人研修に！
木材業に関わる全般的知識、充実した体験実習で、力強い人材育成



木材・合板博物館のご案内

- アクセス** 東京メトロ有楽町線 JR京葉線 東京りんかい高速鉄道 東京メトロ東西線
- 新木場駅** →より徒歩7分
- 東陽町駅** →よりバス ②のりば/木11甲・木11折返 新木場一丁目バス停 より徒歩1分
- 開館時間** 10:00～17:00 (最終入館時間16:30)
- 入館料** 無料
- 休館日** 月曜日、火曜日、祝日 年末年始
- *都合により開館日・時間を変更することがあります
*幼児および小学生の入館には、保護者のつきそいが必要です。
*団体での見学は事前にお申し込みください。

表紙：東京銘木市場の新春特別市鏡り風景。緑のキャップがセリ子さん(本誌「新木場漫歩」参照)

木と合板 第20号 2013年3月15日発行 定価:525円(消費税込)
発行：特定非営利活動法人 木材・合板博物館
〒136-8405 東京都江東区新木場一丁目7番22号(新木場タワー)
TEL.03-3521-6600 FAX.03-3521-6602 Eメール:info@woodmuseum.jp
編集：「木と合板」編集委員会
制作：株式会社デジタルアート



特定非営利活動法人 木材・合板博物館
<http://www.woodmuseum.jp>

木材合板 で 検索 クリック!!